
東方恐竜伝

謀ったな先生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方恐竜伝

【Nコード】

N8524L

【作者名】

謀ったな先生

【あらすじ】

過ぎていく、変化の無い日常、しかし俺はそれで十分だった、なのに

俺はある時、急に非日常の中にほうりこまれた……

東方恐竜伝始まります……

諸注意

この作品は、作者の処女作です、いろいろと至らない点は数多くありますが、

生温かい目で見えていってくださいれば光栄です。

もし、よろしければアドバイスをよろしくお願いします。

注意

この作品には、キャラ崩壊やオリキャラ、といったものが数多く含まれます。

さらに、作者は東方のことを全く知らないので、ネットで調べながら書いていこうと思います。

ですのおかしな点などがあれば遠慮なくズバズバ指摘していたださい、おねがいします。

諸注意（後書き）

それでも、読んでいただけたら、次へどうぞ!!!

プロローグ(前書き)

駄文ですが、どうぞ

プロローグ

> 人生というものは何か起こるかわからないからしっかりと準備しておけよ<

俺はいつも、親にその言葉を耳に蛸ができるかと、思うほど聞かされていた。

しかし、俺はその言葉を話半分に聞き流していた、そのことを今はとても後悔している

そう、今、俺の目の前には黒い穴がポツカリと開いているのである。

そんな穴避けて通ればいいじゃないと、思うだろ、けどな現実にはうまくいかないんだ

そう、この穴生意気にも避けて通ろうとすると、俺の目の前にワープして出てきやがるんだ。

どうしてくれようか、なんて考えていたその時黒い穴に変化が起こった、なんと、あるうことか

この黒い穴、周りの空気を掃除機のように猛烈に吸い込み始めたんだ。

「くそっ、何がどうなってんだ、ふざけるなよ俺はこんな事じやまけねえぞっ」

そう言い、俺は近くにあつた電柱を掴み体を引き寄せようとしたんだが・・・なんと

俺がしがみつこうとした電柱が根元からポツキリと折れやがったんだよおおおー

「この根性無しがっ、それでも、人様のご家庭に電気を送っている電柱かよこの腐れ電柱がー」

るよ

電柱でも折れなくなっちゃうことだってあ

「あれ今何かものすごくイラッと来る言葉が聞こえた気が・
・・てっ、
こんなこと言ってる場

合じゃねー誰か助けてくれー」

Y A D A

なんか、今、神のお告げが聞こえたようナツ・
こっして俺の非日常が始まったのだった・
・
・

ん、俺のことなにもわかってなくね！

プロローグ（後書き）

感想できれば書いていただけると光栄です。

目覚めるとそこは・・・（前書き）

誤字・脱字があればいつてください、それでは駄文ですがどうぞ

目覚めるとそこは……

「うっっ」

意識が暗闇の中から浮上する、それと同時に感じたのは体を襲う猛烈な違和感と、

目蓋が異常に重いということだった。

「くそ、なんでこんなに目蓋がおもいんだよっ」

俺はいきなり訳の分からない事に巻き込まれてイライラしていた事もあって、

普通は溢さないような愚痴を溢しながら目を開けると、

そこは……見たことも無いような深い森だった。

「おいおい、何の冗談だよ起きたらいきなり森って……ふざけてるのか？、いきなり

黒い穴に吸い込まれたら森でしたってそれに、体に、ものすごい違和感もあるし……

いったい何が起きているんだよ!!!」

俺はあまりのことに、取り乱すことも忘れてこの状況に文句を言うしかなかった。

くそっ、叫んで状況が変わるわけがないし、まずは、自分の体の違和感

のことについて調べるしかないか……そう思い、頭をさげてみだが

体が見えない!!、どうなってんだ？、んっ、これは視界に入っていないだけか、

頭を動かしている感じはあるんだがな……とりあえず、

湖か川を

探して鏡の代わりにするしかないか。

俺はそう思って歩き出そうとしたんだが……

ズズーン

なぜかうまく足を踏み出せず、こけてしまった、んっ？、

ズズーンだと……

普通こけても、こんな音でないよな、それにぜんっぜん痛くねーどうなってんだー！！

「本格的にやばいな、早く湖か川を見つけて自分の体を

見て見ねえと。」

俺はそう言いながら、頭をうまく使って何とか起き上ったその時、目の前の茂みから

ガサゴソという音が聞こえてきた、なんだろうと目の前に集中すると、

なんと、なんと、茂みからは100mくらいある巨大なムカデ現れたんだー！！。

「うわーっ！！、なんで、なんでこんなでかいムカデがいるんだよ、やべえこっちに

むかってきやがった」

俺は、そう言いながら逃げ出したが足をうまく動かせず前につんのめって

こけそうになった、その時、反射で両手を前に出し地面に手がついた

時になぜか、妬げにしっくりくるような気がしたが、だがそんな事を気に

している時間はなく、俺はそのまま四本足歩行で走って

逃げた。

「はあはあはあ、もう、追いかけて、きて、ないよな・・・」

地球にあんなでかいムカデがいるなんて知らなかった、
つて在りえるかっ!!

やばかった!!、いま自分の思考能力がおかし
な方向に行くところだった・・・

それより、本当に此処はどこなんだろうか?、それに、
両手を地面に着いた

時に妬けにしっくりきた感じは何だったんだろうか?

そんな事を考えながらなんとなく、周りを見回
してると、

ちょうどいい事に小川が流れていた、その小川を見て、
俺は先程考えて

いた事を思い出し、自分の体が見えますようにと願いながら

川を覗き込んだが、俺の願いはあっさり打ち砕かれた、
川の水面むはむ何も

映してなく、とても澄んだ水がサラサラと流れていくだけだった・・・

「なんで・・・俺の姿が映ってないんだ?」

体が無いなんて落ちは無いと思う、いや思いたい

俺、もしかしてあの黒い穴を通った時にはもう死んでた
のか?・・・

そっいえば、さっきこけた時も痛みを感じなかったな・・・

巨大ムカデも俺が勘違いしてただけで、別に襲ってきて

なかったのだろうか？。

俺がそんな事を考えていると、川の向こう岸にさっき俺を襲ってきた

巨大ムカデが現れた、こちらにゆっくりと迫ってくる巨大ムカデを、俺はどこか他人事のように見ていた。

>>ギチツギチツ　ギチツギチツ<<

巨大ムカデは俺に近寄ってくると、耳障りな音を鳴らしながら鋭利な牙が

ズラリと並んだ口を大きく開け、体が無い筈の俺にその鋭利な牙を突きたてた。

>ガキイ、ガリガリガリ<

!!!!イ

テエ

しかし、俺の無いはずの体はなぜか鋭利な牙を受け止め、耳障りな音と鈍い痛みを

俺に伝えた。しかし、その伝わった耳障りな音と鈍い痛みは、俺が生きていると

確信させるのには十分なものだった。

「イテエ!!、痛みを感じるって事は俺まだ死んでなかったのか!!！」

くっ、まだ生きてるって、わかったのはとても嬉しいが、このままじゃ

すぐにお陀仏だ、だけど、さっきみたいに少し離れている分けじゃ、

無いしどうする、幸いこのムカデの牙は俺の見えない体の表面を軽く削った

だけみたいだし、いっそのまままムカデに噛み付かれたまま、突進してみるか!

今、思ったけど俺の見えない体どんだけ硬いんだ！あんな鋭い牙に噛み付かれて
表面が削れただけって・・・なんか考えてたら、怖くなってきた！

いつ今は考えてないで突進しよう！！

>ドンッ　メキッメキメキッ　ブシュー　グ
シヤク　ピギヤヤヤー

「うえっ、気持ち悪っ、」

俺の突進とともに潰れたムカデは耳障りな叫び声と気味の悪い青色の体液を撒き散らし

ながら死んだ。いくら日常生活で殺しなれている昆虫といえど、

このサイズになると、殺してしまったことに、罪悪感が沸いたが、

さつき、俺は殺されかけたじゃ無いか！という感情でその罪悪感を

胸の奥深くに押し込んだ。

相変わらず耳と目だけしか使えないけど恐らく体全体にある青色の体液が

かかっているんだろうなと思い、洗おうと川を覗き込んだ、そして俺の目

に映ったのは水面に映る薄い紫色の水晶と透き通るような水色の水晶で出来た美しい

竜の顔だった。それを見た俺は一瞬、訳がわからなくなり大きな叫び声をあげた。

「なんじゃこりゃー……!!……!!……!!」

夕暮れの深い深い森の中で俺の哀れな叫び声がつまでも木霊していた。

目覚めるとそこは・・・（後書き）

どうだったでしょうか？

よろしければ感想をお願いします。

更新は遅いですがこれからもおねがいします!!

一 つ目・・・(前書き)

駄文ですがよろしくおねがいます!!

一つ目・・・

なななっ何でこんな竜の姿が水面に映ってるんだよ!!

俺、人間じゃなかったの!! ままっ、まて少なくともあの黒い穴通る前は人間だったよな!

じゃっ、じゃあ、あの黒い穴通ったときに俺の体はもう変わってたことか!!

てっ、俺、気がつけよ!! いろいろとおかしな点が在ったじゃないか!

まずは、目線の高さだろ、次に、自分の体が視界の中に入らなかったことと

何時も通りに走ろうとしたら足が纏れた事だろう・・・

なんか、余りにも判断材料が多すぎて、考えるのが嫌になってきた、よし落ち着こう

さっき見えたのは、幻覚だ幻覚、自分が竜になるなんて在り得ない、よし俺は人間だ! 人間!、そう自分に言い聞かせながら川を覗き込むと、

やはり水面には俺の願いを無常にも打ち砕く、薄い紫色と透き通るような水色の水晶で出来た

美しい竜の顔が映っていた。しかし先程と違う点がひとつだけ在った、それは緑色の水晶が

体全身に線のようにはしりだしていた事だった、だが、俺はそんな事を気にしてるような

余裕はなく二度目の絶叫が夕暮れの森の中に響き渡ると同時に俺は意識を失った。

「ぎゃーーーーー」

ドスンッ

突然、暗闇の中に一筋の光が舞い落ちるその光は寸分の狂いも無く
暗闇の中に眠る（気絶）
水晶で、できた美しい竜に当たる、しかし竜は起きるとは無く
更なる深い深い眠りへと誘われる。（いざなわれる）

俺は、暗い闇の中を何時間も彷徨っていた、これ以上歩き回っても
無駄か、

そう、思い暗闇の中に座り込もうとすると目の前の闇の中で小さな
小さな

光が光ったような気がしてその光の方に歩を進める、すると暗闇の
世界は

急に変貌を遂げ、光があふれる世界へと早代わりする、そして暗闇
の世界

では無かった道が自分の足の下に形成されていく。

俺はこのわけの分からない世界に不安を抱えていたが自分の足元に、
道が

形成されていくのを見て先度まで抱えていた不安が少し軽くなるの
を感じた。

とりあえず形成された道に沿って歩いていくと、道が突然、三つに
分かれた

一つ目は薄い水色の水晶で出来た道 二つ目は薄い紫色の水晶で出
来た道
そして最後の三つ目は薄い緑

色の水晶で出来た道

俺はその分かれ道でしばらく悩んでいると道にだんだんと輝^{ひび}が入って行くの

見て慌てて目の前にあった紫色の水晶でできた道に足を踏み込んだ、しかし、薄い紫色の水晶で出来た道は無残にも砕け散った……。当然、その砕け散った道に踏み込んだ俺は薄い紫色の水晶の破片とともに

落下していった。

先ほどまで三色の水晶で出来た竜を射していた光は突然、波が引くようにスーッと消えていった。

すると光に射されていた竜はモゾモソと身じろぎをし起き上がる。

「あーっ、さっきの夢は何だったんだ？というか、いつ俺寝たんだ？」

んっ、思い出してきたぞ、そうだそうだ自分の姿をもう一度確かめようと川を覗き込んで

水面に竜が映つてて、信じられずに叫び声あげて気絶したんだっ

．．．

くそっ、これが夢だったらよかつたのに．．．

もう一度、もう一度だけ確認してみよう、これでまた竜が映つたらあきらめよう、そう思って、

俺は水面を覗き込むが水面は何も映しておらず、澄んだ水がサラサラと流れて行くだけだった．．．

あれっ？水面に何も映ってねー！！どうなってんの、さっきまでは映っていたよね・・・

なんでなんで？、水面に映って無いんだ！やっぱ体がねーのか！いや、それは無いはずだ、さっき映ってた時と映ってないときの共通点は・・・

疲れていた、違うなそこまで疲れてなかった、

生き物を殺した、これはあってるかも知れないけど自分の姿を見たという理由だけで

殺せるわけが無い・・・それ以前に殺したくない。

傷を負っていた、一番近いかも知れん、なんとなく合ってる気がする。

でも、俺は自分で自分を傷つけて喜ぶような趣味は持ってないから却下。

さてさて、どうするか、そんなことを考えていると、>バキッ、バキバキッ<

後ろのほうから木が折れるような音が聞こえてきた。

俺は音が聞こえたほうにいそいで振り返ると、なんとそこには人間一度は

図鑑で見たことがある恐竜が強大な迫力とともに鎮座していた。

えーっ！、なんでこんな所にティラノサウルスがいるのっ！！、絶対、食われるって俺っ！！！！

あれっ、まだこっちにティラノ気がついてなくね、よし今のうちに逃げよう、そうしよう。

この時、俺は相当テンパっていたんだと断言できる、だって、間違えてティラノ様の方に

俺は突進して行ったんだから・・・

> スドドドッ

トガッ、ボキィッ< シギ

ヤーーーーー

バカバカバカツ、なにやってんの俺、せっかく逃げられそうだったのに無謀にも

突進って、バカなの死ぬの！

くそっ、やってしまったことはやり直せないし、どうしよう出来る事なら、三秒

い！！！！

ととっ、現実逃避してなくて今の状況何とかしないと、まず、目の前には

骨が腹から突き出してそのうえ、内臓が飛び出て弱っているティラノサウルス、うぷっ

気持ち悪くなってきた、でも今気持ち悪がっていたら殺される！！
そう思い、目の前のティラノサウルスを見据える、そして今、自分
が出来る最高の攻撃方法

を考える、突進くらいしか出来ないよな俺、でも、突進一撃であそこまでティラノサウルスを、

弱らせたんだ、もう一撃加えたら必ず死ぬはずだ覚悟を決める俺・・・

よしっ、行くぞ！！

>ドンッ、ダッダダダダッ

ブスッ、グチャッ、ビ

チャビチャ<

ツ~~~~ー

頭から肉を引き千切る嫌な感触が僅かに伝わってくる。

俺はその嫌な感触につい突進を止めてしまい大きな隙を晒してしま
う、その瞬間

ティラノサウルスは鋭い牙の生えそろった口を開け、強力な力を込
め俺に噛みついてきた。

しかし、俺の体は表面を軽く削られるだけで済んだ。

俺は噛みつかれた衝撃で気を持ち直し口を大きく開け、>>グチュ

ツ<

テイラノサウルスの腹を食いちぎった……その瞬間、口の中に濃厚なドロツとした液体が広がった。

「うつつ、　　ビチャビチャ」

「ハアハアハア、気持ち悪い、二度と口で生き物に噛みついたりするもんか!！」

「でも、これでもまだ好い方が……全く味が分からなかった……」

くそつ、変な体にされた上に、視覚と聴覚と感覚以外が全く感じなくなつてやがる、

もし、神がこんな体にしたんなら、いつか会った時殺してやる!！とりあえず、謀らずとも俺が考えた姿が見えるようになる理由が三つとも

達成されたんだ、もう一度見てみるか……
そう思い、俺は川のほうに移動し水面を覗きこんだ、そこには透き通るような水色の水晶が体を形作り、薄紫色の水晶が刃物のような翼を模っている、美しい竜が映っていた……

「やっぱりか……はははっ、俺、もう、人間じゃ、無いんだなっ」

覚悟していたけど、やっぱりキツイな……自分の目で人間じゃないって確認するのは……

俺がそんなことを考えていると、自分の体に薄緑色の線が張り巡らされていく、

その過程で、急に頭の中に浮かび上がってきた言葉があった。
もう、これくらいで驚けないな……

>> 無傷の時は姿が見えなくなる程度の能力<<

何だこれ？、無傷の時は姿が見えなくなる程度の能力？……
・
なるほどな、さっきまで自分の姿が見えなかったのは無傷だったせ
いか、なるほどなるほど、
あれっなんかおかしな点があったような……程度の能力？……
・
それってもしかして、この世界は東方なのか、そうだとしたら……
……
ものすごく死ぬ確率が大きいじゃねえか！！
原作の方もほとんど知らねえし、くそっ、こんなことなら兄貴にも
う少しやらして貰っとけばよかった！

「うがーっ！！！！、絶対、神の奴殺す！！」

俺の、神への理不尽な殺気を籠めた叫び声は薄暗くなってきた、深
い森に響き渡った……

一 目 次 (後書き)

どうだったでしょうか、このような駄文を読んでいただきありがとうございます！

もし、よろしければ感想を送っていただけませんか？

できれば、アドバイスもよろしくお願いします！！

脱字報告もお願いします！！

瞬間（前書き）

駄文ですがよろしくお願いいたします!!

瞬間

前回のあらすじ、

戦闘後に能力が目覚めた、主人公、しかし体は人間でないものに作りかえられていた、

その体に作り変えたかもしれない神に理不尽な殺意を向けた。

変えた言語

主人公 水晶竜

深い森 密林

暗くなってきた密林の中に突然、膨大な量の殺気が込められた咆哮が響き渡る。

その咆哮を聞き、弱き物達は新たな天敵の誕生に震え上がり、異形達は

異形の新たな誕生に歓喜の咆哮を上げる、

そして、異形達の王は目指す、新たな異形のもとへ……

「ふうー、完全にスッキリした訳じゃないけど少し落ち着いたな」

俺は、一頻り叫び声を上げ気分を落ち着けた、

さてと、まだ叫び足りないけど此処がもし東方の世界だったら、命が幾つあっても

足りないからな、叫ぶ時間があったら、自分の能力をうまく使えるように練習していたほうがいい。

まあ、練習の前に現状確認だよな、さてと、どんな状況かな？

あれ？なんも見えなくなっ……あつ、

当り前か、もう夜みたいだし……っってもう夜！はやくね、どうしよう寝る場所すら確保してねえぞ、

でも、こんな暗い中移動するのは絶対危ねえよな、体も使い慣れてないし、

体が……もうこの事を考えるのはやめよう、気が滅入るばかりだ、

とりあえず、今、移動するのは危険だよな、このまま此処で寝るか？俺の、

>>無傷の時は姿が見えなくなる程度の能力<<

だったら何とかなると思うんだよね、姿が見えないなら襲われることはないと思うし……

よし、決めた今日は此処で寝よう、明日明るくなったらちゃんとした寝床を探してみるか。

俺は、この時、自分の能力が隠れる事にすぐれていたため油断していたんだと思う。

そう、この時はまだ東方の世界という物がどれだけ危険か俺は理解していなかったんだ……

もし、もしもこの時、俺がしっかりと東方の世界の危険さをしっかりと理解していたら

あんな事にはならなかったと思う……

新たなる異形の誕生それは、この密林の異形達の王を動かすことになった、
異形達の王は歩を進める、この密林での王は誰かということを新たな異形に
教えるために・・・

空に暗い雷雲が立ち込める、その雷雲から吐き出された雨粒が
容赦なく大地に降り注ぐ、>> ザアツァー<<
その強烈な雨の中にまだ眠る者がいた・・・

暗い暗い闇の中に一人歩く少年がいた。

「またこの夢かよ・・・」

「この前はずっと歩き続けたんだっけ？」

うーん、ほんと何なんだろうな？この不思議空間は
今回は、ここで座っておいたほうがいいのか？、なんかこの位じゃ
もう驚けなくなっただな・・・喜んでいいのやら悲しんでいいのや
どっちかわからねえな、まあ、とりあえず歩き回って疲れるのは嫌
だし

今回はここで座っておくか、その内、この前の真っ白不思議空間が

展開されるだろうしな。

一時間くらい経過。

まだか、もう少しここに座っとくか

二時間くらい経過。

まだか、まだなのか！

くそっ、このまま座っていてもあの不思議空間が展開しねえし、
また、前みたいに歩き回ってみるしかのねえのか！

「ああっ、くそっ」

俺が、そういいながら歩き出した瞬間、世界は唐突に変化を始める
暗闇の世界は光に溢れ、そしてむ足元には水晶で出来た美しい道が
作られる。

「移動した瞬間にこれって、やっぱり移動しないとだめなんだな」

あーあっ、さっきまでの時間はなんだったんだろうな？

とりあえず、先に進むか、この前みたいに割れたら困るからな・・・

しばらく先に進むとこの前の夢と同じ三又の分かれ道が見えてきた。

「おおっ、見えてきた見えてきた、この前と同じ道だ」

この前、割れたのに同じ道があるのは不自然だと思っただけやっぱ
なんかあるんだろうな……さて今回はどの道に進んだらいいか
な？……

よしっ、決めた今回は紫色に進んでみるか！！

そう俺は心の中で決め紫色の道にこの前の夢のこともあり
おっかなびっくり足を一步踏み出した、しかし薄い紫色の
道は碎けることはなく、しっかりと俺の体重を支え俺の行くべき道を
示してくれた。

「よしっ、今回は碎けなかったな、さあっ先に行って見るか」

俺の不安をいい意味で裏切ってくれた道に感謝しつつ上機嫌で
道を進んで行った

¥

いつまで、歩けばいいんだよ！！

もう5キロは歩いたぞ、碎けなかったのはいいけどこんなに歩くな
んて

聞いてねえよ……んっ、あれなんだ、なんか見えてきたぞ、
見えてきたもの、それは巨大な一枚の扉だった……

「うおっ、でけえっ一体何mあるんだ？上がみえねえ」

まあ、デカイのは良いけどどうやって開ければいいんだ？

さすがにこのサイズになると腕力とかで開けるのは絶対無理

だろうし……うん、取りあえず押して見るか意外と簡単に開いたりして。

俺はそんなこと有りえないことを考えながら目の前の巨大な門に手をつけた、その時
頭の中に突然聞こえてきた声があった。

>> 力が欲しいか <<

「うわ、」ドスンッ

俺は、突然聞こえてきた声に驚き、尻もちをついてしまった、

「な、んだ今の声、」

俺は、聞こえてきた声に恐怖感を覚え尻もちを付いたまま、ズリズリと後ろに下がっていった

しかし、ズリズリと下がっていくうちに急な浮遊感を覚え何気なく下を見てみると

今まで在った道は砕け散っており俺はそのまま、下へと落ちて行った……

意識が夢の世界から引きずり戻される、目が覚めて俺が最初に見たのは、
暗い空と降りしきる土砂降りの雨だった。

うわー、雨かよ、良くこんだけ雨に当たって俺目が覚めなかった

な、

いや、逆か？雨が当たったからあの夢から目が覚めたのか？

まあいいや、それよりあの夢で聞こえた声確か>> 力がほ

しいか <<

だったな、あそこでビビらずに「欲しい」と言ったら何が起こった
んだらうな？

今度また同じ夢を見たら、ビビらずに言うてみるか、二度あること
は三度あるってね

三回目があるのを願ってようか。

俺がそんなことを考えていると、突然、先ほどまで聞こえていた虫
たちの声が聞こえなくなり

代わりにズシツ、ズシツと地面の上を重たいものが歩くような音が
聞こえてきた。

なんだ、いきなり虫の音が聞こえなくなったぞ！！、何が起こって
んだ？

んっ、なんかこっちに近ずいてくる、この音からするかなりデカイ、
取りあえず、逃げた方がいいだろうな、昨日のティラノサウルスみ
たいなやつは

もうお断りだ、音は左から聞こえてくる、なら俺は右側に音を立て
ずにゆっくり移動していくか。

そう考え、俺は川岸を離れ、音が聞こえてくる反対側の方になれな
い体で歩を進めた、

しばらく、音を絶えずに移動していると、少し開けた場所に出た、
相変わらず虫の鳴き声等は聞こえないが、慣れない体で変に気を使
って

歩いた所為で精神的に疲れていたので不気味に思いながらも此処で
一度

休むことにした。

しかし、現実には非情な物で俺には休憩というものは与えられなかった……

変わりに与えられたのは死との対面だった……

>>

バサツ、バサツ、バサツ、バサツ、<<

ズズーンツ

突如、上空から羽ばたくような音が聞こえ俺の目の前に異形が降り立つ。

>>

—————<<

その異形は空から降り立つとまずは威嚇だと言わんばかりに咆哮を上げ、

能力が発動しているはずの俺の体をまるで見えているかのように睨みつける、

俺はその一睨みだけで心の底から震え上がり、此処から逃げろという本能にしたがって全力で異形の前から逃げ出した、

しかし、異形は最初からその行動を読んでいたと言わんばかりに翼をつまく使い俺の退路を塞ぎ、翼の勢いを利用し突進してきた。

俺はその突進を防ぐことも、避ける事も出来ず空中を舞った……

その突進された時の衝撃で一瞬意識が飛びそうになったが

地面に落ちた時の衝撃で何とか意識を保つことができた

俺は地面に落ちた時の衝撃を利用し何とか起き上り

見失った相手を探す、しかし相手を目視することは叶わず

代わりに俺の視界の中に入ってきたのは巨大な火球だった、

俺は突然の事で反応できずに顔面からその火球を受けてしまい

あまりの激痛にのた打ち回ることになった

「あゝ——————」

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ
イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ
イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ
イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ
イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ

異形達の王は目の前でた打ち回る水晶でできた
竜を見つめ本能で理解する、

コイツは俺の存在を脅かすものだ、だから此処で
殺さないといけない。

絶対に逃がさない……

激痛で支配されていた思考が少しだけ正常に戻り、今の自分の
状況が分かってくる、今の自分は炎に焼かれ
視覚と聴覚は使えなくなり、唯一残っている感覚は
激痛に支配されている、俺はその状況に
絶望し、力がもつとあればとただ願った。
しかし、その願いは叶うことなく無情にも振り下ろされた
異形の王の尻尾が焼けただれた顔を打ち砕いた……

次回、お楽しみに！

瞬間（後書き）

原作キャラの口調等を教えてください、できればキャラクター説明や
異変の事などもお願いします！というか原作知らないので東方に
関する事ならなんでもお願いします
感想もよろしく！！

産声（前書き）

遅れてすいません、駄文ですが宜しくお願いします

産声

頭を砕かれた竜は地面へと倒れ伏す、
異形達の王は自ら手を下した竜の死骸をしばらく眺め
そして、暗い雨雲が支配する空へ飛び去って行った。

「力がほしいか」

頭が砕かれた瞬間

激痛に支配された感覚は潮が引くように消え、周りの景色が黒く塗りつぶされる

そして、あの時答えられなかった問いがもう一度問われる
俺はその問いに迷うことなく

「欲しい！、あいつを殺せる力が、そしてもう二度と蹂躪されることが無い力が……」

「力がほしいか、力がほしいのなら、くれてやろう」

答えた、すると声が響き、黒に塗りつぶされていた景色が色を取り戻し、
砕かれたはずの頭が再生する、そして、頭の中にあのときのように言葉が浮かび上がる。

>> どんな石でも創り出し自由自在に操れる程度の能力
<<

その言葉が、頭の中に浮かび上がると、同時に能力の使い方までが頭の中に流れ込んでくる。

俺はその使い方を少し思案した後、作りたい石のことを頭の中で想像する。

すると自分が考えていた通りの石が目の前空間に突然現れ

フワフワと空中に浮く、俺はその作り出した石を見た後

頭の中で消えろと念じる、すると石は最初から何も無かったように消えうせた。

「よし、使い方は分かった、後はあいつを追いかけるだけだな！」

あいつは、どこに行った？

分からなくても、絶対探し出して殺してやる！

地上から探すよりも空から探すほうが絶対早いよな、

俺はそう考えをまとめ、翼を広げようとしたがうまく翼が広げれずその場に立ち往生する、

「どうやって、翼使った？、背中に力を入れる感じでいいのか？」

くそ、こんなところに伏兵がいるなんてこれじゃあ、

あいつが追いかけていけない・・・くっ、こうなったら破れかぶれだ
全身を動かす感じで行くぞ！。

この後、五分ほどバタバタと暴れまわる竜がみられた。

「くそっ、どうやってたら空が飛べるんだ！」

あれから、全身を激しく動かしたが、何もコツがつかめず

俺は意気消沈していた。
しかし、返ってそれがよかったのか一つの名案が頭の中に
浮かび上がってきた。

「そうだ俺の能力を使って翼を操ればいいんじゃないか
なんでねこんな事に気がつかなかったんだ」

まあ。いまさら悔やんでも意味が無い、

おれはそう考えると、早速能力を使い翼を動かしてみた
結果は上手く行き大空へと舞い上がる事が出来た

初めて自力で飛だ事に感動しつつあたりの密林を見渡す
しかし、あいつの姿が俺の視界に入る事は無く

ただただ、この体になる前は絶対に見ることの出来ない
広大な密林が視界の中に入ってくるだけだった。

俺はあいつを探すことを諦めることが出来ず
その後、二時間ほど空を飛び回ったが、見えたのは
大きな沼と巨体な密林だけだった。

しかしね俺がそろそろ一度地上に降りようか、そう思ったとき
あいつは現れた、あいつは俺から視線をそらさず
一直線にこちら側飛んでくる。

俺はあいつを見つけたことに歓喜の咆哮を上げるその咆哮はあいつ
咆哮
と重なり密林を振るわせた。

「—————」

そして、俺は能力を使い黒曜石の槍を幾つも創り出し
こちらに向かって来るあいつに向けて面で撃ちだす、
撃ちだした黒曜石の槍の幾つかはかわされ、残りの
三十本の黒曜石の槍は鈍い音を立てながらあいつの鱗を剥ぎ落とし

「ギャリギャリッ　グチュウ」

浅く突き刺さった、それにも関わらずあいつは速度を落とすことは無く、今度はこちらの番だと言わんばかりに口を大きく開け、巨大な炎の玉を連発で撃ちだしてくる

「ドンっドンっドンっドンッ」

俺はあいつが口を開けた瞬間に回避行動としてジクザグに飛行したが連続で撃ちだされる巨大な炎の玉はかわせるような生易しいものではなく翼と背中命中し俺の体を激痛と共に溶かしていく、俺は激痛に意識を飛ばしけながらも

能力を使用し、溶けた水晶を消し、新たな水晶を創りだし穴を埋める。

そのついでに自分の周りに厚さが三十センチもある

円形のダイヤモンドを七つ創りだし浮遊させる、

そしてそのダイヤモンドを盾にして時間を稼いでいる間に

黒曜石の槍を創りだし先ほどのように面で撃ちだした

しかし、黒曜石の槍は巨大な炎の玉により溶かされ

一本もあいつに届くことは無かった、しかし俺の攻撃があいつの注意を一時的そらした結果あいつは俺に大きな

隙を晒す事になった、当然俺がその隙を見過ごす分けもなく

黒曜石の槍を創りだし今度は面での攻撃ではなく

貫通力を高めるために一列に並べ連続で撃ちだした、

今度の攻撃はあいつも避けることも出来ず

俺の黒曜石の槍があいつの頭から胴体を貫通していった。

すると、あいつは急に動きを止め地面へと落ちていった

産声（後書き）

どうでしたか、よろしければ感想を送ってください。

あと、東方の情報お願いします

能力ですが、石に含まれている物質は鉄で合っても一緒に作り出せ
ます

とりあえずる一番最後に石がつくものと、一般的に石とされている
物はOKとしてください。

能力研究「某ゲームの石登場」(前書き)

某ゲームの石が登場します
短いですがどうぞ

能力研究「某ゲームの石登場」

俺があいつを殺してから数分後

俺はあいつを探しているときに偶然見つけた大きな沼の畔に能力の研究のために来ていた。

うーん、新しく目覚めた能力の使い方は分かるんだけどな
どこから何処までの範囲で石が作れるかわからない。
さっきの戦闘では偶然上手く入ったからよかったけど
戦闘中に創れない石を創り出そうとして隙を晒したら
命取りだしな、今のうちに確りと範囲を確認しておかないと。
戦闘中に創り出した中に宝石が在ったから
たぶん宝石類は行けると思うけど、空想上の石だったら
どうなんだろう？

創り出して良い武器に成りそうな石が多いゲームといたら
やっぱ、あのゲームだよな。えーっと、石の名前と形を
想像して目の前に創りだすっつと。

すると目の前に燃え盛る紅蓮石と呼ばれる石の槍が
現れた、

おおっ、空想上の石も創れるのか！、これなら凄く応用
範囲が広がるな、よし種類はここまでにして次は形だよな
槍だけじゃ攻撃方法が片寄るからな。
形の参考は色々あるから簡単だな。

剣・斧・ハルバート・手裏剣・円盤型とか今思いつくのは
これ位か、そういえば一つの形創り出している時は他の形の

創れるのかな？体とかは想像しなくても作り出せたけど
あつ、そういえば俺、創つてたジャン槍と円形の石
でもあれは一つずつだったからな同時に形の違うのを
創るとしたら、別々の形のやつ思い浮かべねえといけねえんだよな
難しいなオイ。

とり合えずやって見るか……

てっ、できねえ同時に別々の形を想像するなんて無理だ
創り出しとしてドンドン形を変えていくしかねえみたいだなあ
ハア、意外と使いにくいかも知れんこの能力、最初は
使いやすそうだと思っただけどなくあ。

沼に住む異形視点

いつもと違う生き物の匂いが畔から漂ってくる。
その匂いを辿って畔まで行って見たが目には見えず
ただいつも道理の景色が広がっているだけだった
しかし、匂いだけは確実にある、
だからその匂いの一番強いところに本能の赴くままに圧縮した
水を打ち込んでみた、するといきなり竜が現れ咆哮を上げながら
燃え盛る何かを撃ち出してきた、その飛来する何かを避けることが
出来ずに串刺しにされた。

竜視点

油断することができない世界だなオイ
油断したらそこで試合終了かよ……

マジでイテエあのクソ野郎、いきなり胴体を水で打ち抜きやがって、
おかげで、試験的に創った紅蓮石で出来た矢の出来を
見る前に撃ち出す事になってしまった。

まあ、あそこで死んでいる奴のこと見たらよく出来てた
てっ、事か……。なんか今日は疲れたしもう寝るか、
でも、さっきみたいなことになりそうだな、そうだ

能力でシエルター創って寝ればいいんだ！
そうと決まったらさっさと創って寝るか
材料は黒曜石で良いかな？

真っ黒だし、光を通さなくて良い。

うん、いい出来だ真っ暗だ、よし寝るか！
んっ？

なんか揺れてるけど良いや寝よ寝よ。

能力研究「某ゲームの石登場」(後書き)

感想、お願いします

あと、東方の情報お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8524/>

東方恐竜伝

2010年10月10日19時20分発行